



(二) 用例の後に付けた註記の中、例えば(中女↓初老男)とあるのは、中年女性の、初老の男性に対する発言であることを示し、単に(中女)の如くあるものは、中女の発言の相手が皆筆者であることを示す。

一 滋賀県東辺の状態

蒲生郡日野町の方言と、東浅井郡吉槻部落及びその周辺の方言とは、「湖南的」対「湖北的」のように相対立する二方言と見られるが、広く中部地方の尾張美濃方言に対立せしめるときは、滋賀県一とりわけ東辺の一方言としての、一定のまとまりをもって存立している。

〔その一〕 日野町の方言

(一) 文アクセント 註一

日野方言文アクセントの第一特色は、高音連続の傾向と云つてよい。その例、

○イップク シーナ。(中女↓初老男)

○カゼ ヒカントカイヤ。(中男↓娘)

次は尾部卓立の傾向。次のようなのを、特色ある卓立傾向と認めるのである。

○チョト セナカ マガッタヤハリマス。(中男↓校長)

○ドーセ ホヤロト オモテル。(中女↓初老男)

この抑揚の調子は、上品で控えめな訴えかけの効果をもつ。

(二) 文末部

単純感声の文末部では「ナー」が著しく、次いで「ヨ」があげられる。「ナー」の盛んなことは、ナ行の他の文末部「ノ」や「ネ」などをほとんど聞くことができないほどである。すなわちこの「ナ」的なことばやりとりが、この地方の方言生活の基本的な性格のようである。ヤ行では、「ヨ」がよく発達しているほか、「ヤ」「エ」も行われる。「ヤ」よりも「ヨ」が盛んだということは、後述吉槻の場合と対蹠的で、興味深い。「ナー」の例、

○キョーワ サムオス ナー。(中女↓同)

○イッラヤッタイ ナー。(中女↓初老女)

これらは、単純端的な云いかけになっている。次に「ヨ」の例、

○モツテキテグレンデモ ヨイノニ ヨー。(初老女↓中女)

相手の関心を喚起する文末部として働いている。

準感声的文末部で目立たしめるのは、「サ」「ン」「ン」である。

「サ」は

○ヒヤクシヨウワ ヨー ユーテナハル ワサ。(中女↓母)

のようなのを一般用法とする。

○ホー カイサ。そうなのかい。(初老女↓中女)

のようなになると、複合のしかたに興味がある。

一般に、「サ」の表現効果は、「ゾ」や「ゼ」などのもつ線の太さ・相手への迫りの強さに対すれば、「明かるい主張性」と云つてよいものである。面白いことに、「サ」は「ワ」に接着複合し易い傾向にある—広くは、近畿方言全般についても云えると思う—が、上述のような効果をもつ「サ」が、内攻的な「ワ」に結びつき易いというこの事實は、文末部表現の特別な意義を物語ると同時に、日野方言ひゞては近畿方言の一般的性格につながるものと考えられる。次に、「ゾ」は男女の別なく行われている。品位も低くない。

○ヨイ オマツリドス ゾ。(老女)

を見ると、外来者に対する「ドス」的話線の上に、「ゾ」が連なり出ている。

転成文末部で特に注目すべきは「ワ」である。<sup>註五</sup>

○ネッシンナ オシトガ オス ワ。(老女)

○マタ ムコモ オモシロオスヤロ ワ。向うの方もまた面白いでしょうね。(中女)

この後の方の例はどう見るべきか。

「ワ」の次には、「ナシシ」「トカイ」「ヤンカ」などが注意される。「ナシシ」の例、

○スンマセン ナシシ。(中女↓初老男)

日野における文末待遇法のうち、品位の最も高いものであ

る。「トカイ」は、例えば

○エラッソーニ ミタントカイ。見てないでくれ。なまいきな！  
(小男↓同)

のような有様である。その出自が「とオカレ」(「れ」は尊敬の助動詞の命令形)(藤原与一先生の教示による)であるにしても、現用の当面は、常に文末にあって一定の意味効果を表わす、一まとまりの文末部と見られよう。「ヤンカ」も同様の次第で、文末部と見得るものである。

○マツリマデニ タベタラ エー ヤンカ。…いいじやないの。  
(中女↓初老女)

### (三) 待遇表現

日野方言における代表的な尊敬表現は、「ナサル」ことばである。

○オツマミナサツテオクレヤス。(初老女↓校長) ▲菓子鉢を出しながら

のように、ごく鄭重な物云いに「ナサル」そのままの形が現われるようであるが、多くは「ナハル」「ヤハル」「ハル」その他の形が現われる。

○トッシヨリワ「ワシワシ」テユワハリマス。ホー。(中女)

これは、動詞未然形に「ハル」のついた形になっている。四段動詞に関わる場合は皆こうなる。物は、「云イ・ヤハル」であらう。「ヤハル」は程よくだけた気持の尊敬表現である。

「ナサル」系の尊敬表現にはまた「ナシタ」がある。「ナサイマシタ」の転訛であろう。この形しかない。敬意鄭重の度の高いものである。むしろ、上品ぶった物云いだとさえいう。

○オコタチガ デキナシタラ……。お子供さん達が出来になったら。(老女)

「ナサル」系の尊敬表現に次いで、「ヤス」ことばが取上げられる。これもよく行われるものである。

○コンナコト カイテ モツテカイリヤスノ。(老女)

これは終止形の場合。二人がよく打解けた時の発言であつた。

○オツマミナサツテオクレヤス。(初老女↑校長)

これで命令の表現になっている。

次に、これは一軒の青果店の店先でのこと、

○ナニナイテラル ノー。どうして泣いているの？(少女↓姉)

と現われた。すると、傍にいた母親が、「姉さんに向かってそんな言葉遣いはするものでない。」と妹をたしなめた。また、別の所で、

○アッコニ イラツタラ シヌノヤラヘン。(老女)

とあったのは、不運に戦災で死んだ息子のことを悲しみ口惜しむ言葉であった。この「ラル」ことばは、年少者に対する親愛の待遇法と見られる。女ことばと云ってよいか。これの出自について、藤原先生は次のように推論された。もとはや

はり「レル・ラレル」ことばで、過去形の、例えば「居、ラレタ」が「イラツタ」と崩れると、これは四段動詞に類推されて、終止形その他の活用形が生まれた。待過効果もこの変化に従って変り、尊敬から今日の親愛へと移ったと。

次には、丁寧表現について述べよう。

○セーワ アンマリ タゴオセンカ。(中男↓初老男)

この種の「形容詞・オス」の型が特徴的である。尤も、右例だと、形容詞はその連用形を全うして、「オセ」はなお独立動詞性が強いが、

○キョーワ サムオス ナー。(中女↓同)

のように、連用形が短呼され、恰も幹語に「オス」のついたような型になっている場合、「オス」は助動詞の用法に近う。

「ドス」もまた、日野方言中の一特色である。頻繁に行われる。その一例、

○ホーラ(それはく)ニギヤカドスゾー。(中女)

「ドス」が「でオス」からのものであるとすれば(滋賀県境に近い岐阜県揖斐郡広瀬には、まさしく「でオス」の形が古老によって行われるのを見た。後述するはずである。)、日野方言丁寧表現法が「オス」ことばに負うところは大きいと云わねばならない。なお、「オス」は、独立動詞(存在詞)としても繁く行われている。

(四) その他の語法・音韻

語法面その一は、接続助詞。まず「サカイ」があり、次いで「デ」が見える。接続詞にも「ホンデニ」があった。所謂逆接では「ケンド」が注目される。「ケド」も多い。

語法面その二は、形容詞「善い」が連体格に立つときは、「ヨイ」であって、「エー」とはならないこと。述部に立つときは「エー」のようである。

次に音韻面。第一に「ガ」行鼻濁音の問題がある。土地の有識者によれば、語中語尾では例外なくこれが現われることであるが、簡単に云いきれぬところがあるようである。

第二に〔h〕〔v〕〔s〕のこと。「オセン。」が「オヘン。」となり、「ソヤロ。」が「ホヤロ。」となるなどの類である。概してこの傾向は著し。

第三に、「流イサ」V「流した」V、「探イサ」V「探した」の類。これは、土地の藤井馨氏の教示による。サ行四段動詞がイ音便を起すと共に、過去の助動詞「タ」が「サ」どなる。同様に「傘さしておいで。」は「傘サイソイデ。」のようになる。西桜谷その他の、日野周辺部にあるという。「日本方言学」音韻篇(一一八べ)に触れられた現象と思う。

〔その二〕 東浅井郡吉槻部落とその周辺

(一) 文アクセント

日野に見られた二つの傾向は、ここでも同じ趣である。高音連続の例は割愛して、尾部卓立の例は、

○イタガラセン。痛がりはせんよ。(老男→初老女)

○チ。クセツヤデ デンシー。直接だから血は出ないしね。(初老女→老男)

などであるが、また、  
○ケーヤクシテモー。イクノヤサカイ。契約してね。行くんだからね。(初老女→老男) (以上三例とも吉槻)

(二) 文末部

単純感声の文末部には、「ナ」(ナー)の外に、「ネ」(ネー)、「ニ」(ニー)がある。「ネ」「ニ」は、多く「ヤ」と複合して「ネヤ」「ニヤ」となる。注目すべきものである。土地人の意識では、「ナー」が最もよい言葉であり、「ネー」はそれよりきたない言葉、「ニヤ」は更に下品とある。「ナー」の例は省して、「ネ」「ネヤ」「ニ」「ニヤ」の例、

○ツイタテブリヤデ ホラ ハンツキ フリヤネ。月の朔日に雨だから、このぶんでは半月雨降りだね。(老男) (甲津原)

○イタカッタヤロ ガネヤ。痛かったらうにねえ。(初老女→老男) (吉槻)

男 (吉槻)

○ホラオマイ、ニー。そりゃあんだ、ねえ。(初老男) (吉槻)

○キニーシューカラ ニヤ。云々。(初老男) (吉槻)

因みに、吉槻ことばの特色をこめた云い慣らわしに次のようなものがある。

○「ウラウラ」(自称代名詞) ヌーナイ。ウラマデハズカシワー。

モ一「ニヤ」(文末部) ユワントコ ニヤ。オレ(君)。(老男による)〔吉槻〕

ナ行文末では「ヤ」が特に盛んで、「ヨ」がこれに次々と云ってよかるるか。その盛んな有様は、「ヤ」では、その単独形のほかに、「ワイヤ」「ニヤ」「ネヤ」などの複合形の存在によって知られよう。「ヨ」では、

○ギフケンソニンゲンワ ホイヨヨ。(中男)〔吉槻〕

○ホーヨイ。(青女↓中男)〔吉槻〕  
などとあった。

転成の文末部では、第一に「ワ」(ワイ)の活動日野に類して大きく、珍奇なものとして、吉槻・甲津原に「ナレ」(板並部落にもあるという)、隣郡の近江長岡には「ホン」が行われている。「ホン」の例、

○ロクシマエニ オキント アカン ホン。(中男による)

○ワシガ オソエタロ ホン(右同)

○モイソデロ ホン。もう帰ろつと。(右同)

(三) 待遇表 現

○キョーサンジンニ ナッテミヤンセ。共産党員になってみなさい、そしたら云々。(初老男)〔吉槻〕

この「ヤンス」ことばの命令の形、さほどに敬意は高くない。むしろ親しい間の待遇法かと思われる。

○ヒトコロデ シャベシタラ ヨカロ。話しなざつたらいいでしょう。(老女)〔吉槻〕

これは「シャル」ことばの転訛と云われる。この「シャル」に関わる「ンス」ことばも一例とつてゐる。

「ハル・ヤハル」ことばは、近江長岡・伊吹あたりまでは聞かれるが、吉槻まで入ると、聞くことができない。次の例は、「ハル」か、日野に見えた「ル・ラル」か。

○アゲタルユワッタラ。(中女↓同)〔甲津原〕

○カエラッタ カ。(中女↓同)〔吉槻〕

○ツカワンス」チュワル ワナ。 (中女)〔近江長岡〕

また、次の例は、「ヤハル」か、「ある」敬語の「ヤル」か。

○モ一ノンデアルノ。(青女)〔吉槻〕

○オーイ。ニゲヤッタゾーイ。(少年↓同達)△鬼ごっこ▽〔伊吹〕  
吉槻とその周辺の待遇表現(尊敬)は、大凡以上のような有様である。卑しめの表現はどんな風か。

○ナニオベシヨベシヨ カキサラス。(初老男) △筆者が記録するのを見て▽〔吉槻〕

○ナニヤツテクサルノヤト オモチ。(同右)〔同右〕

○ハヨ デテイキヤガレ。(少年↓同達)〔伊吹〕  
この種の表現が特に目立つ。敬語法に比して、卑しめの表現が多く聞かれるように思う。

(四) その他の語法・音韻  
接続助詞は日野によく似ている。特に変わったものは見当らな。



○シツジョー ワカラスト オツテ ヨー。実情もよく分らずにい  
てだね。(中男→同達)

のような強い抑揚に乗った「…ヨー。」の用法は、日野など  
のと全く趣が違う。

準感声的文末部としては、「ゼ」がよく聞かれる。

転成の文末部には、「ワ」があり「ニ」があり、「ナモ」  
「ノモ」「エモ」「キヤーマ」(かゝも)などがあって、い  
ずれもよく当地の特色を示している。

○エーワ。ナンデモ聞カッセルデ エーワ。(老男→同)

ここでも「ワ」の表現効果は、自己本位の控えめの訴えと  
云うに値する。ところで、「ワ」は他の文末助詞と種々複合す  
るが、常に先行して、後に立つことがないのは、どう説明す  
べきであろうか。「ニ」は、例えば

○ヨバレルデ エーニ。御馳走になりますから、お構い下さ  
らなくていいですよ。(中男→初老男)

○ソリヤー ワカランコト エーニ。そりゃ全く訳の分らぬ  
ことを云いますよ、ほんとに。(老男)

のように、告知の用法に立つ。

「ナモ」「ノモ」「エモ」「キヤーマ」の例は、次の通り。

○ヒヤクシヨウワ エモ。コジキトモ 言エンクライダ ワナモ。  
(老女)

○ノミノシンサイ(濃尾の震災) ノトキニワ アツダ ガノモ。

(老男)

○ワシ キヤーマ。(私ですか。)(ロクジュー。)(老女)

「モシ」という文的な呼びかけ言葉が、自在に接着転成し  
ている。当地文末部表現の、「モシ」に負うことの大きさを  
思わせる。更に、日野の「ナーション」に比すると、同じ「モシ」  
の發展形式が、彼此このように違ってゐる点に注目されるの  
である。

### (三) 待遇 表現

刈安賀の代表的な尊敬表現は、「セル・サツセル」及び  
「ヤース」である。次いで、「ス・サス」が挙げられれ  
る。

「セル・サツセル」の例、

○テンノーヘーカモ デテ歩カッセル ワ。(老男)

○ツトメサツセルコトワ ツトメサツセルケドモ アマリ ダ  
ダヤクサダデ。(老男) ▲報恩講がお粗末だから▽

これらの尊敬の対象を見ても分るように、敬意の度は高い  
ものである。次「ヤース」は、

○マダ イヤース ノ。まだ居るの？(初老女→?)

○名古屋イ、イッテミヤー。(中男→同)

のような有様になる。「セル・サツセル」程に敬意の度が  
高くなく、親しみある尊敬表現法のようなである。しかし、  
「ス・サス」と比べると、こちらの方がやや品がよいとい  
う。

この他になお、「レル・ラレル」敬語、「シャル」敬語、  
「ゴサル」敬語などがある。更に、



○オミズ タムト アカン ヨ。(中女↓幼男)

○ミセテコイ。ヤブンナ ヨー。

の如きで、吉槻のに似てゐる。

準感声的のものでは、「サ」「ゾ」が聞かれた。

転成の文末部では、「ワ」「ニ」「ナモ」などがある。

(「ナモ」は、尾張方言の代表的な文末部であった。)

「モ」は、ここでは、老年者がごく丁寧な話し方のときに用

さ、彼のように日常化してはゐない。その一例、

○ソレワ トーイトコノ オシトチャ ナモ。(老女)

(三) 待遇表現

「シャル」ことばの例、

○オポーサンワ ソー クワシーコトワ ユワツシャランガナ。

(老男) 「オニナル」敬語法の例、

○カワニシノ オボサンワ コトシ オカクレニナツタガナ。(老男)

「ヤス」ことばの例、

○ヒロセツテトコワ ハジメテ オイデヤシタ ノカ。(老女)

○アノオジーサントコイ イツテオイデヤス。(老女)

その他、「てゴザル」「てミエル」「てオイデル」などの敬

語法がある。また、所謂謙譲の表現に、「てクダサレた」が

老人から聞かれた。

最後に、「丁寧表現に「ドス」「でオス」を見出す。

○ミナ ソコライ アスビニイッテキタンドス。(老女)

○ナニモカモ カワリマス。エライコトデオス。(老女)

待遇表現を通じてみるのに、「ヤス」「ドス」などは近江

系のものと思われるが、「てゴザル」「てミエル」敬語など

は東方系のものと思われる、ここにも混雑を認めることがで

きる。

(四) その他の語法・音韻

(五) 接続助詞

多くは「デ」が順接に用ゐられるようである。「トサイ

ガ」もある。

○タダノモンチャデ カサクワ。ただの物だから沢山食べます。

(老男)

○撒クトサイガ ツベタイドーシチャデ ナー。(老男)

(ろ) 指定の助動詞

「チャ」が普通のように、「ヤ」も併せ行われる。

○ワガウチー。ナンチャロ。シンカオ ヨンデナ。自分の家へ、

あのほら、親戚をよんでね。(老男)

○コド(清水の湧く所) がアリマスンチャ。(老女)

○ハチジューエンヤラー。オマエ。(少年↓同) 〆店でぜんまい

を金に替える。量目を計っているところ

○テンデ スミガ チガツテクンノヤ。(老男) 〆炭焼きのこと

(は) 打消表現の過去形「ナンダ」

○ソコワメグツテオイデヤ シナンダ ノカ。(老女)

(に) 「買う」などの促音便形



つてよい。しかもこれはまた、伊勢方言文アクセントと同似のものとしてよいようである。

(二) 文末部

單純感声的のものでは、「ナ」「ネ」「ノ」「ヤ」などがよく聞かれる。「ナ」の例、

○スミヤキガ ホンシヨクミタイナ モンヤナ。 (老男)〔時〕

○オブライトアルナ。 (小女↓中女) △疑問の「ナ」▽〔本郷〕

「ネ」の例、

○センド シナハル ネー。御精が出ますね (初老女↓同) △挨拶

抄ことば▽〔本郷〕

○イツ カエルン ネ。 (少年)〔本郷〕

○オトコモン カネ。 (中女↓青男)〔時〕

準感声では、「サ」「デ」「ソ」などが聞かれた。

転成の文末部には、「ニ」「ワ」がよく聞かれた。「ナ

モ」「ナシ」は聞かれなかった。「ニ」の例、

○アレミヨ。ーカカッセル ニー。それごらん。お書きじやない

か。 (少年↓同達) △筆者が記録するのを見て▽〔本郷〕

○ナラボ ニー。整列しよろよ。 (小年↓同達)〔本郷〕

「ワ」の例、

○ワリニ ホンデ カネガ ナインデス ワ。それでいて比較的

貧乏な村なんですよ。 (中男)〔本郷〕

○イマノモンデワ 三ネンカカッテモ 読メヤヘン ワナ。 (老男)

〔時〕

文末部表現について、これを広瀬に比較してみると、「ナ

モ」がないだけで、殆ど同似の状態である。文末部表現の地盤は、本郷・広瀬など、更には吉根周辺、日野までも、ともどもよく似たものようである。

(三) 待遇表現

「ス・サス」・「シャル・サツシャル」・「ナハル」・「ゴザ

ル」などの尊敬表現の他に、尾張に特色あるものと見られた

「セル・サツセル」敬語が、両地ともに盛んに行われている

という事実は、注目に値するであろう。以下これらの用例を

示そうと思う。

「セル・サツセル」敬語の例、

○コノヒトワ ソーユコトワ キライヤラ、マイラセン。 (老男)

△寺詣り▽〔本郷〕

○ゼンブモ 書カッショ カー。 (小男↓同)〔本郷〕

○ローソー (老僧) ガ ヌワツセルコトワ……。 (老男)〔時〕

第二例の「書カッショ」は「書カッセよう」であろう。

「ス・サス」の例、

○マタ書カシタ。書カシタ。や！この人また書いた書いた！ (少年独言)〔本郷〕

○シヤカニヨライノ 読カシタ原始仏教ワ……。 (老男)〔時〕

「シャル・サツシャル」の例、

○マンザイデモ サツシャルノヤ ワ。 (小年↓同)〔本郷〕

「ナハル」の例、

○センド シナハル ネー。 (初老女↓同)〔本郷〕

○金一ツァンワ ココデ ヲマレナハツタヤデ。 (青男↓中女)〔時〕

「てゴザル」敬語の例、

○ゴムモツテ「ゴザル」。(少年→同達)〔本郷〕

○オンナジコトオ ヌイノヨシテオルテワロテ「ゴザルデー」。(老男)〔時〕

なお、本郷では、その昔古老たちが「ゴアス」「ゴース」を云っていたという。

さて、「ナハル」に代表される総じて近畿的な待遇表現法の体系の中に、かの尾張の特色と見られた「セル・サツセル」その他の敬語法が組み入っているこの状態は、近畿・中部接壤の中間地帯と認めしめる重要事項であろう。因みに、「セル・サツセル」敬語は、伊勢桑名市の漁港赤須賀や四日市市の漁場富田にも行われている。興味深い問題を含む分布様相である。

(四) その他の語法・音韻

語法面では、時村の方に、指定の助動詞「ヂヤ」「ヤ」が併用されているのを見、カ変動詞連体形がこれは両地とも「シル」の形で行われているのを見る。

音韻面では、時村で「ai」連母音の相互同化、拗長音の傾向が見られるようである。この地に生まれ、この地に住み続けられている一老人の口から「展示会」が「テンジカエ」のように発音された。数回にわたって聞かれた。これは本郷では聞くことのできなかつたものである。もしこの発言が、時村に一般的の現象であるならば、尾張などの「チャー」に続くも

のであろうから、中間地帯を示す、今一つの事項となる。

〔註一〕「国語アクセント論叢」藤原与一「方言」文アクセントの研究」(五一九頁)

〔註二〕「国語学」第十一輯、藤原与一「日本語表現法の文末助詞—その成立と生成—」(六四頁)

〔註三〕同右

〔註四〕同右(六六頁)

〔註五〕同右(六七頁)

## あとがき

以上は全く概況報告にすぎない。それにしても観察が粗雑で、はずかしく思うしである。ここに認めた中間地帯は、主として、東西両面から眺めて得たものであるが、それが更に南北に亘って、どんな姿容を示しているかというような問題がある。また、その中間地帯が南に向かってどんなに伸びるか、換言すれば、伊勢方言とどんな関係で結合するかという問題があろう。一口に近畿方言と云っても、伊勢方言の位置は、周知の如くおのずから特異であるが、その特異性は、ここにいる中間地帯との関係の上にはしらないかと考えてみるからである。

中間地帯という用語は、甲乙両地を定着しておいて、丙地を説明しようと企てた、一時的な名称であるにすぎない。ゆくゆくはこの名称も、全日本方言共時態動態の中に解消するはずのものである。

(広島県立国泰寺高校教諭)

(昭三〇・七・二七初稿、昭三一・一一・一五改稿)

正誤表 (近畿・中部接境地方方言の調査報告)

[誤]

五九上 ○ド―セ ホヤロトオモテル。

五九下 V

五九下 ○ケ―ヤクンテ―エ―。

五六上 ○ホ―ヨイ。

同 ◎ロクジマエニ……ホン。

五六上 ○ジツジョ―……ヨ―。

五九上 ○アレガ タカダ御坊ヂャ……。

同 ○俣勢オネド―……ウタツテ。

五九下 ○オカイコト……オイテモラッテ。

同 ◎ナニモ……モラッテクダサレテ。

同 ○ミナ―……アソビニ……。

六〇上 ○オボ―サシワ……エワッシャランガナ。

六〇下 ○撒クトサイガ……ナ―。

同 ○ハチジュ―エンヤラー。

六一上 ○ドコイ……ムコノ……。

六一上 ○アレミヨ―カカッセルニ―。

六一下 ○コノヒトワソ―ユコトワ……。

[正]

○ド―セ ホヤロトオモテル。

V

○ケ―ヤクンテ―エ―。

○ホ―ヨイ。

◎ロクジマエニ……ホン。

○……ヨ―。

○タカダ御坊ヂャ……。

○ウタツテ。

○オイテモラッテ。

◎モラッテクダサレテ。

○アソビニ……。

○エワッシャランガナ。

○ナ―。

○ハチジュ―エンヤラー。

○……ムコノ……。

○アレミヨ―カカッセルニ―。

○……ソ―ユコトワ……。